

# 戦国時代のベトナム陶器

戦国時代(15世紀後半～16世紀後半)は、国内では群雄が割拠し、互いに争う戦乱の時代でした。一方、ポルトガル人やスペイン人が相継いで日本にやって来て、鉄砲やキリスト教を伝えるなど、国際交流が大いに拡大した時代でもありました。

焼物の世界でも、それまでの唐物(中国製の陶磁器)に加えて、朝鮮や東南アジアの陶磁器が茶器を中心に輸入されるようになります。

展示品は三田城跡(三田市)の堀から出土した戦国時代後半のベトナム陶器ちょうどうがめの長胴甕です。釉薬のかからない焼締め陶器で、口縁部は短く直立し、肩はあまり張らず、底部に向かって緩やかにすぼまっています。ベトナムでは穀物や水を入れる日常雑器でしたが、日本では葉茶壺として珍重されました。県外では南蛮貿易の拠点であった堺環濠都市遺跡(大阪府堺市)やキリシタン大名として有名な大友宗麟の本拠地豊後府内遺跡(大分県大分市)から類品が出土しています。



(学芸課 岡田 章一)

ベトナム陶器 甕